

---

# 風上の使い魔は風神少女

相沢

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

風上の使い魔は風神少女

### 【Nコード】

N0556BA

### 【作者名】

相沢

### 【あらすじ】

射命丸文が、タバサでは無いもう一人の風使いに召喚されています。

## プロローグ（前書き）

無謀にも『東方×ゼロ使』に挑んでしまいました。

稚拙な文ですが、精一杯頑張ります。

## プロローグ

幻想郷。それはこの日本の山奥の何処かに存在すると言われる、  
幻の存在となつたモノ達の住まう理想郷。

そこには現代世界に於いて、いる筈の無いモノとして処理されて  
しまったモノ達 幽霊や妖怪や幻獣、果ては八百万の神々達まで  
が存在し平穩に暮らしている。科学の発達により行き場を失ってし  
まった彼らにとって幻想郷は、正に理想郷であると共に、最後に行  
き着く場所でもあつた。

その幻想郷は今、新しい年を迎えようとしていた

1月1日、元日。

「はあ……やっと終わりました」

幻想郷の中にある大きな山……通称『妖怪の山』と呼ばれる山の中にある天狗の里。その里の中を、1人の少女が安堵の息を吐きながら歩いていった。

濡れ羽色と呼ばれる、理想の黒髪を肩に掛かる位に伸ばし、大きく瞳を持つ少女の名は『射命丸文<sup>しゃめいまるあや</sup>』。天狗の中でも鴉天狗という部類に属している彼女は幻想郷中を飛び回る新聞記者として、幻想郷に住まう人妖には少々名の知れた存在である。

「はあ……全く、毎年毎年新年祭は疲れますよ」

文は歩きながら誰とも無くそう嘆いた。

本当ならば今直ぐにでも新年第1版のネタ探しに飛び回りたい所なのだが、生憎今日は元日。上下社会を築く天狗達は皆新年の儀式やら宴やらで大忙しであり、それは文と言えども例外では無い。現に今だって、正装した上で上司である大天狗に新年の挨拶を終えたばかりなのだ。

それに元日は天狗の掟で哨戒担当の天狗以外は飛ぶ事を許され無い。よって、自分の家兼印刷所に帰るのにもこうやって歩かなければいけない羽目になっていた。

「はあ……」

文は溜息を吐きながら家へと急ぎ足で歩き続ける。今の文の格好は白衣<sup>あらいし</sup>と呼ばれる白い合わせの衣に水干<sup>すいかん</sup>と言う貫頭衣を被り、緋袴を履いた姿。その外見は紅白の腋巫女では無く、ちゃんとした巫女

さんの正装と思って貰えればいいだろう。

更に、腰には1本の黒塗りの鞘を持つ太刀が提げられており、足には2本歯の下駄。いつもとは打って変わった姿の文だったが、それゆえにいつもの洋服に着替えたいと思いき急いでいる節もあった。

この格好が当たり前の時代もあったが、それは昔の話だ。天狗の正装も嫌いでは無いが、やはりいつもの格好の方が動きやすいし、何と云うか自分が選んだ洋服は社会に縛られない『自由』な感じがして好きだった。

文は急ぎ足で歩き続ける。空は新年から清々しい程の晴天であった。

「さて……これは何の嫌がらせなのかしら？」

家兼印刷所の玄関の前に立った文が、顔をしかめながらそう零した。

何故なら、家の玄関を塞ぐ様にして大きな鏡が立っていたからだ。

鏡は楕円形でやたら豪華な装飾が施されており、尚且つがっしりと家の扉に嵌まっていた。

「全く、誰がこんな事を……」

こんな下らない事をする下手人は想像付かないが、ネタにはなるか。そう思いながら、文は鏡を退かそうと装飾が施された枠を両手で掴む。とりあえず退かさなければ家に入れない。

だが……。

「ふんッ！ んんー！ ふぬうー……………あれ？」

どれだけ力を入れて持ち上げようとしても、鏡はびくともしなかった。というか、動く気配すら見せない。

文は妖怪である。外見は見目好い少女だが、その気になれば人間を遙かに超える力を出す事ができる。それでも尚、鏡は動かない。

「もう、これじゃ家に入れないじゃない……………」

がつくりと肩を落とした文は、鏡の前にへたりこんでしまう。空は晴天なのに、自分の心の中は太陽も見えない曇天だ。どんてん

もう玄関の脇にある窓を蹴破って入ってしまおうか。下品だがこの際仕方ない。そう考えていた時だった。

「ん……………」

文の目が俄かには信じられない光景を映し出す。

「これは……」

文は立ち上がり、鏡に近付いて見る。

何故なら鏡の鏡面。それが淡く光り輝き始めていた。生来の、そして記者になってから更に増幅した好奇心に駆られた文は、試しに指を鏡面に触れさせてみた。

「わ……」

すると、鏡面は指を中心にしてまるで水面に物を入れた様に波立つ。

「新手のスキマが何かでしようか……？」

もはや驚きの連続で地の口調と外面の丁寧口調が混ざり合っている文だったが、一体鏡の先はどんな世界なのか、ふつつつと入ってみたくなる衝動に駆られる。

もう一度指を差し込んでみる。反応は同じだった。

多分危険は無い。危険があっても直ぐに逃げれば問題無い。危険が無かったら少し見て、装備を整えて改めて来よう。そう考えた文は好奇心に負け、

「よし………とっしー」

遂に鏡の中へ一息に飛び込んだのだった。



そして、すぐに後に彼女はこの時自分がカメラを持って行かなかった事、何故他人に相談しなかった事等を後悔する事になるが、それはまた次のお話。

かくして2つの世界が交わる時、新たな物語が始まる。

## プロローグ（後書き）

御意見御感想、ありましたらいつでもお待ちしております。

## 衝撃的な出会い（前書き）

何か短いですが、作者の妄想が暴走しています。特に文の武器関連。

## 衝撃的な出会い

「ん……………」

文はぼんやりと頭に霞みが掛かったまま、薄目を開ける。灰色の見慣れない天井が目映った。

「あれ…………？ 私、確か…………」

一体何をしていたんだっけ…………？

どうにも記憶が曖昧なまま、ゆっくりと起き上がる。白いシーツが敷かれたベッドに座って、自分がいる所を見渡した。

部屋は広くない。隅に置かれたこのベッドの他には中央に丸いテーブルと椅子、ベッドとの対角線上に置かれた本棚、その隣に置かれたタンス以外に家具らしき物は無い。

「…………ベッド？ テーブル？」

いつの間にかこんな洋風の部屋に来てしまったのだろうか？ 天狗の里にはこんな家無いし、山を降りた記憶は

「うぐっ…………！？」

刹那、頭に猛烈な痛みを感じて、文はベッドの枠を手で掴みながら床にうずくまった。痛みはすぐに治まったが、直後に今までの自

分の行動が頭の中を高速で流れ始める。

「そつだ……！ 私はあの鏡の中に飛び込んで……」

全てを思い出した。思い出して、すぐに自分の姿を確認する。

白衣びやくいに水干、緋袴ひかまと言う正装姿。別に何処か弄られた形跡は無い。

だが、文はまるでこの世の終わりの様に両手で頭を抱えて再びうずくまった。

記者としての必需品が、無い。

「カメラも手帳もペンも忘れた……おまけに団扇も……」

私…… やっちまったよ……と、文は床に両手を着く。カメラと取材道具が無きや、この鏡の中の世界が取材できない。そして団扇が無ければ自分の能力がフルに発揮出来ない。

「うつつう……でも、落ち込んではいられません。ここが何処だか把握しないと……」

1分も経たない内に、文は立ち上がった。忘れた事は悔やまれるが、引きずってなんかいられない。

再び部屋を見渡す。あの鏡は見当たらない。幻想郷に戻るかはわからないが、彼女にとってそれはあまり問題では無かった。種族として人より遥かに長い寿命を持つ彼女からすれば、寧ろ戻れない不安よりもこの見慣れない場所への好奇心の方が強かったからだ。

「取りあえず外に出てみますか」

そうして扉へと向かった文は、

「あ……」

扉の脇の壁に立て掛けられている黒塗りの刀を見付けて、足を止めた。

「そういえば、貴方も連れて来てしまっただんですね……『陣風』」

刀に駆け寄り、まるで親しい人を労るように話し掛ける。それから文は刀を拾い、全てが漆黒に塗られたその柄を掴み、おもむろに抜き放つ。

「やはり貴方はいつでも綺麗ですね……」

黒い鞘と柄に相反する様に、その刀身は少ない外からの光を反射して光り輝いていた。

3尺刀。刀身の長さが3尺（90cm）である事からそう呼ばれる種類の長刀の1本が、文の愛刀『陣風』であった。

自分がまだ人の形を取り始めて間もない頃から、一緒にいた相棒風を自由に操れる様になり武器が刀から主に団扇へ、そして記者としてカメラを持つようになってからも、手入れだけは欠かした事が無かった。

「ふふ、当時の私は間合いの広さを重視していましたからねえ」

文は微笑みながら柄も含めると130cm近いそれを構えてみる。もはや行事以外には使わなくなっていたが、中々どうして自然と正眼の構えが取れていた。

ちなみに、何故当初そんな長い物を腰に差していたのかというと、背中に背負うのはラフだから駄目だと上から言われたためだった。もともと、文以外の新年の行事に参加する女性天狗は、彼女の様に長い刀を持つ者は殆どいない。したがって、殆ど文にのみ出された制限でもあった。

「今は煩い上司もいませんし……折角だから少し振ってみようかな」  
部屋に誰もいないしね。

文は懐かしさを感じながら、刀を上振り上げる。天井は意外に高く、天井に切っ先が突き刺さるようなへまは起こさない。

そして、剣道の素振りの要領で刀を振り下ろそうとした時だった。

「……………」  
「……………」

扉を開けて入って来た小太りの少年と目が合ったのは。

小太りの少年                   マリコルヌ・ド・グランドプレは、召喚の儀式が全て終了して自室に戻って来た所だった。

春の使い魔召喚の儀の際、彼は酷く狼狽していた。何故なら自らが召喚したのが、不思議な装束を着た女の子だったからだ。

召喚したと同時に気を失って倒れ込んだ彼女に、マリコルヌは慌てて駆け寄る。

女の子は珍しい黒髪に見たこともない白い服に、赤いロングスカートの様な物を履いていた。マントは羽織っていない。腰には鞘に納まった細身でかなり長い剣。人間のようだが、メイジではない。

周りからは、

「風つぴきが平民を召喚したぞ！」

「それに変な服……」

「剣なんて、何処の野蛮な民族の女なのかしら」

等と言った軽はずみな嘲笑が聞こえる。

ただでさえ臆病で太ってるという2大コンプレックスを抱える彼に、使い魔が前代未聞の『平民』だったら更に恥だ。これじゃゼロ



のルイズを馬鹿に出来ないじゃないか。

焦りと恐れから拳を握る彼に、その震える肩を優しく叩く人物がいた。黒いローブに身を包み何とも寒々とした頭をした、この使い魔召喚の儀の監督する教師コルベールだった。

「ミスタ・グランドプレ。少々いいかね？」

「は、はい」

マリコルヌがびくりと肩を大きく震わせて返事をする、コルベールは少女に近付いてしゃがみ込み、真剣な表情で彼女の首元や額を触り始めた。

「ふむ……どうやら深い眠りにについているようだね。ミスタ・グランドプレ。申し訳無いが、この娘を君の自室まで運んでやってはくれないか？」

「で、ですが契約は……」

「彼女が起きる気配が無いのでは始まらない。それに、後もつかえている。とりあえず、彼女が起きたら私の所まで来なさい」

そう言つて、彼は持っていた生徒の名簿が載った紙のメモ欄に羽根ペンで何かを走り書きする。

マリコルヌは不安そうにそれを見つめていた。

「これでよしと……。ちゃんと書いておいたから、落第にはしない。ほら、早く彼女を運んでやるんだ」

「わ、わかりました」

こうして不思議な少女を魔法で浮かせて自室まで運んだマリコル又は、再び儀式の場まで戻って来ていた。

使い魔召喚の儀式で召喚される使い魔は、召喚するメイジの力量と属性によって決まる。目の前でクラスメイトが召喚するのは、やはりモグラやフクロウやカエルと言った、そのクラスメイト達の属性に関係するもの。力量によっては龍やサラマンダー、グリフォン等の更に上の幻獣級の使い魔を召喚出来る。

マリコル又はクラスメイト達から少し離れて、その様子を無然とした表情で見ている。

自分と同じ風属性のクラスメイト達は皆フクロウとかカラスとか、中には風龍を召喚した奴まで出てきた。それなのに自分は何で平民の……女の子なんだろう。

「はぁ……ぼくにも風龍とか、カッコイイ使い魔だったら良かったのに。何で……いや、待てよ……？」

ぼくが召喚したのは、平民だけど……女の子。

女の子、おんなのこ、オンナノコ。

「……………」

マリコルヌの懺然としていた顔が、俄かに輝きを取り戻していく。

彼には生まれてこの方、彼女どころか親しい女友達さえいない。そして使い魔は、主人であるメイジに一生傍に仕える『パートナー』である。

そこで、マリコルヌは自室のベッドに寝かせた少女の姿を思い出してみる。

鼻は高く無いが、決して不細工では無い。寧ろ整った顔立ちをした、自分には勿体ない位可愛い。そして珍しい黒髪と不思議な格好のせいかも知れないが、クラスの子とは違う……何か、神秘的な美しさが少女にはあるような気がした。

マリコルヌはサッと今の自分の顔を見られぬ様に下を向いた。あんな可愛い娘を使い魔に出来たら……違う意味で、どんなに誇らしいであろうか。

「ぼく……もしかして当たり引いた？」

儀式の場で爆発が起きてもう一人の『平民』が召喚されたのは、その直後だった。

そして時間は進み。マリコル又は自室への廊下を歩いていった。

あの後ゼロのルイズが平民を召喚した。男だったが、自分が召喚した少女と同じ黒髪だった。何だかゼロのルイズと同一視されそうな気がして嫌だったが、今はそれ所では無かったからだ。

起きた女の子になんて声を掛けようか。マリコル又の頭は今現在それで一杯だったのである。

そして上機嫌で扉を開けた先に

「……………」

「……………」

こちらに抜き身の刀を振り上げる、女の子の姿があった。

## 衝撃的な出会い（後書き）

この作品は作者のノリと勢いで出来ています。でもご意見やご感想や要望はいつでもお待ちしております。

そして文の武器は私の完全なオリジナル設定です。

彼女にも刀は似合うかなと思ひまして……それに、烏天狗は剣術にも長けているというのを聞いた事がありまして、そこから来ている節もあります。

さて、では作者はこの辺で。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0556ba/>

---

風上の使い魔は風神少女

2012年1月9日00時48分発行